

Title	墓制から見た弥生時代の近畿北部
Author	肥後, 弘幸
Citation	市大日本史. 12 卷, p.41-56.
Issue Date	2009-05
ISSN	1348-4508
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学日本史学会
Description	

Placed on: Osaka City University

墓制から見た弥生時代の近畿北部

肥後弘幸

一 はじめに

私は、昭和四〇年代に開発の激しい長岡京跡の所在する乙訓地域で育つたため、小学校高学年から中学生にかけて、根っからの考古学少年として過ごしてきた。大阪市立大学法学部に進学したものの考古学研究会で学び、卒業後は、京都府教育委員会に奉職し、文化財保護に携わりながら今日を迎えている。大学では政治学を専攻し、「政治とは権力による富の再分配」の教えを糧に、学生時代以来、近畿北部をフィールドに、弥生時代の地域政治について語ることが私の研究目標である。

本稿の主題は、「地域に残された弥生墳墓、古墳（考古資料）から地域の歴史を復元する。」ことである。ここでは、近畿北部の弥生時代後期の墓制の復元を通じて、「丹後を中心とした近畿北部には、弥生時代に独特の墓制を持つ豊かなクニがあった。」ということを明らかにすることである。文献史学を学ばれる方にも、近畿北部の弥生時代

の社会状況が、墳墓の発掘調査を通じて少しずつわかってきているのだと理解していただくことができれば、考古学を歴史学の材料とする者としては、光栄である。

左は「中国の歴史書に残る弥生時代後期の日本の様子」伝える文献史料である。これらの資料が示すことは、次のおりである。朝鮮半島の向こうに、倭人の国があり、前漢時代には百余りの小さな国があり朝貢に来た。後漢の光武帝の時には、印綬が与えられた。魏には、

樂浪海中有倭人。分爲百餘國。以歲時來獻見云。〔漢書〕
倭人在帶方東南大海之中、依山島爲國邑。舊百餘國、漢時
有朝見者。今使譯所通三十國。〔魏書〕
建武中元二年、倭奴國奉貢朝賀、使人自稱大夫、倭國之極
南界也。光武賜以印綬。安帝永初元年、倭國王帥升等獻生口
百六十人、願請見。〔後漢書〕
桓靈間、倭國大亂、更相攻伐、歷年無主。〔後漢書〕
其國本亦以男子爲王。住七八十年、倭國亂、相攻伐歷年。
乃共立一女子爲王。名曰卑彌呼。〔魏書〕

図1 2世紀末の東アジア

三〇国が朝貢している。2世紀後半(桓帝、靈帝の治世は、一四六―一八九年)には、倭国内で争乱があり、女性が王になって争いが収まった。女王の名は卑弥呼である。

本稿では、このような文献資料に対し、近畿北部における発掘調査の成果、考古学の成果はどのようなことを明かしにしつつあるかという点である。対象として扱う資料は当該期(弥生時代後期)の墳墓である。

最初に、近畿北部の位置について確認する。図1の○印をつけてい



図1 2世紀末の東アジア

る場所は、2世紀末頃の日本における文化圏のまとまりを示している。日本海側には、北部九州、出雲、近畿北部、北陸というまとまりがあり、私はそれらの地域が一定の文化圏を共有したカタカナで書くところの「クニ」と表現されるものだと考えている。

日本海の4つのクニはいずれも、半島・大陸の近くにあり、自由に交易していた可能性がある。このうち、近畿北部というまとまりは、旧国の丹後、但馬及び北丹波、兵庫丹波の地域にあたる。この地域はもとは、「タニハもしくはタニワ」と呼ばれた地域で、丹後という国名は登場するのは、七二三(和銅六)年の丹波分国からである。分国以前の丹波の中心は丹後にあつたようで、和名抄に記された丹波郡は現在の京丹后市峰山町及び大宮町にあたりと推定される^①。丹後を中心とした近畿北部の地形的特徴は、川の流れが非常に緩くて、平野が未発達なことである。近畿北部の由良川、円山川という二大河川は非常に勾配の緩いいわゆる山陰型河川で、河口部には広い平野を形成しない。丹後半島を貫流する竹野川も同様である。気候的には、山陰東部に位置し、冬は曇天で、日照時間が短くあまり米づくりに適した地域とは言えない。しかし、以下に述べるように考古資料から、弥生時代には、地域色豊かな富める地域であつたと伺い知ることができる。

二 弥生時代中期までの墓制

次に弥生時代中期までの近畿北部の墓制について述べる。

図2は、弥生時代前期から中期までの墳墓の分布を示したものであ

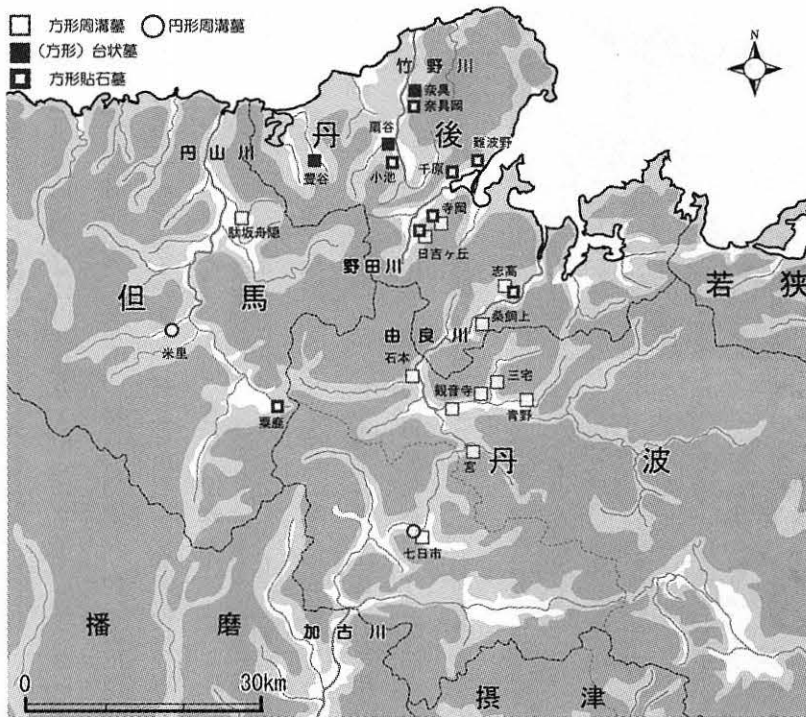


図2 近畿北部の主要な弥生時代墳墓（前期～中期）

る。この地域では、造墓活動が山の上で開始される。弥生時代前期から中期の前半にかけては、立地は同じでも形態の違う二種類の墳墓が存在する。京丹後市七尾遺跡では、丘陵を削りだして方形のマウンドを作り出した台状墓が検出されている。当該期の集落は隣の丘陵上に位置する扇谷遺跡である。京丹後市久美浜町の丘陵上には、中期前半

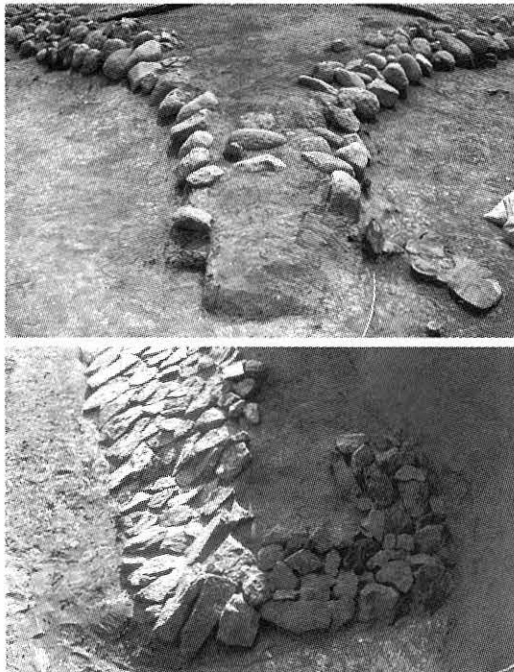


図3 山陰の四隅突出型墳丘墓と丹後の方形貼石墓の隅部の違い（上、米子市洞ノ原2号墓、下、舞鶴市志高遺跡2号墓）

の小さな台状墓二基で構成される豊谷墳墓群がある。一方、豊岡市駄坂舟隠遺跡では、丘陵上の平坦地に溝を巡らした方形周溝墓群を築いている。当該期の集落は丘陵眼下の自然堤防上に立地する河原遺跡である。八基の方形周溝墓の墳丘上には、一もしくは二基の埋葬施設が営まれていた。この時期の埋葬施設の中からは、駄坂舟隠遺跡で玉類が、駄坂舟隠遺跡と豊谷墳墓群で多数の石鏃が出土している。

中期中頃～中期末にかけては、墓は山の上から下りて、集落（居住域）に隣接して築かれるようになる。これは、近畿地方中央部で居住域に隣接して方形周溝墓群が築かれているのと同じ現象である。しかし、造られる墓の種類は豊富で、近畿中央部で一般的な方形周溝墓以外に、西部瀬戸内に多く見られる円形周溝墓、前代から続く方形台状墓、そ

四つの墓制と後期の墓制との諸要素を比較したものである。後期の墓制が方形貼石墓の要素を多く引き継いでいることがわかる。

三 近畿北部型弥生時代後期墓制の誕生と4つの特徴

近畿北部の弥生時代後期の墳墓に係る資料は、平成一三年末の集計で、四八の墳墓関連遺跡から検出された二〇二の区画墓と八九二の埋葬施設がある。その概要は付表2のとおりである。弥生時代後期の時間軸については、図6に示す①期から⑦期の七期に区分する土器編年案に基づくものとする。弥生時代後期の開始をを一世紀の初頭と考え、

①期の開始をその時期におく。参考資料とした終末期の資料を「青龍三年顔氏作鏡」と記された方格規矩四神鏡が出土した大田南5号墳の年代を魏の年号の青龍三年（二三五年）に副葬されるまでの時間を加えて二五〇年頃とする。すなわち、①②期の後期前葉を一世紀の初頭から一世紀の第三四半期に、③④⑤期の後期中葉を一世紀の第三四半期から二世紀の第三四半期に、⑥⑦の後葉を二世紀の第四四半期から三世紀の第二四半期に概ね該当させたい。

先述のように弥生時代中期までは、近畿北部に四つの墓制が存在している。由良川流域は方形周溝墓が中心で、加古川流域や円山川流域では方形周溝墓を主体に一部円形周溝墓が加わっている。丹後半島部では平地の方形周溝墓が見つからないが、丘陵上には、台状墓と方形周溝墓の存在が知られている。加えて、丹後半島を中心に広い範囲で方形貼石墓が見られる状況である。いずれの種類の墓も、居住域に隣接し

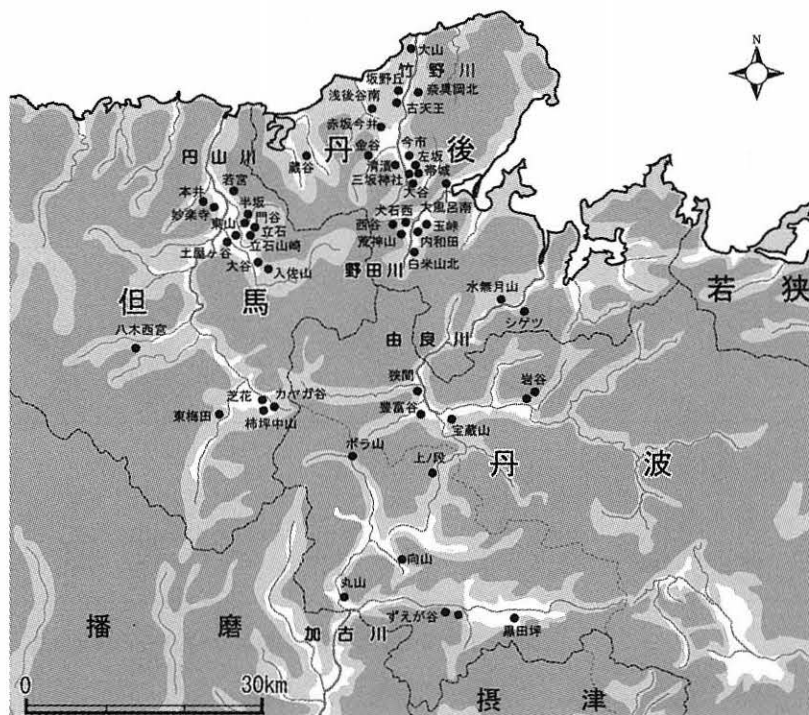


図6 近畿北部の主要な弥生時代墳墓（後期）

て営まれている。ところが、後期になると一斉にこれらの墓制は姿を消し、居住域から離れた丘陵上に営まれる台状墓の墓制に統一される。図5は主要な弥生時代後期の墳墓の分布を地図上に示したものである。図2に示した弥生時代中期までに較べて遺跡数ははるかに多く、地図上でも後期に造墓活動が盛んになっていることがわかる。これら

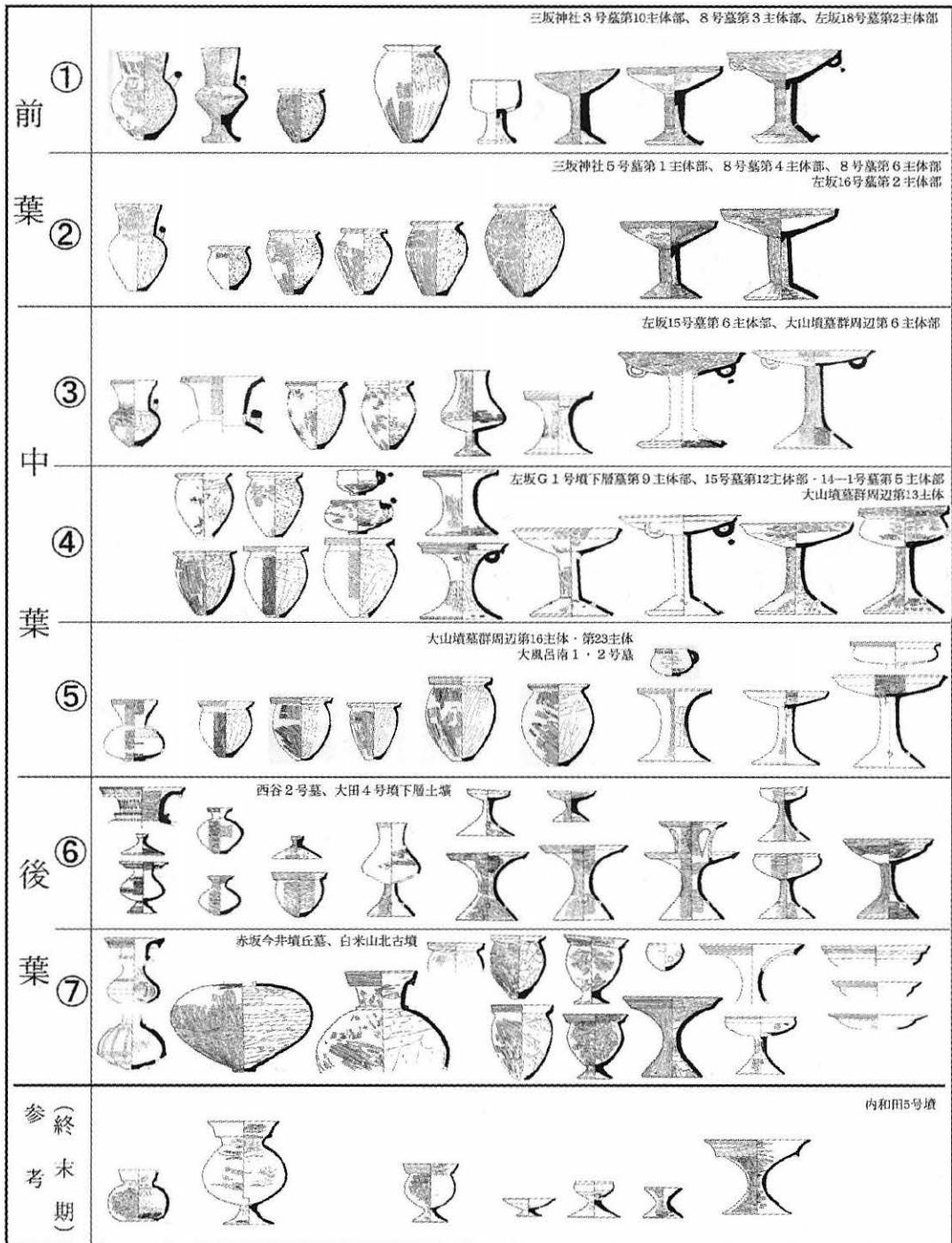


図6 丹後地域の弥生時代後期の墳墓出土の編年試案

付表3 近畿北部の弥生時代後期前半の4墳墓群の被葬者の構成

	乳幼児				小児・若年		成人		合計 埋葬施設数	
	土器棺	土墳墓	木棺墓 (~1.2m)	小計	割合	木棺墓 (1.2~1.7m)	割合	木棺墓 (1.7~2.8m)		割合
三坂神社墳墓群	4	0	12	16	41%	5	13%	18	46%	39
左坂墳墓群	0	6	14	20	51%	2	5%	17	44%	39
大山墳墓群	9	5	3	17	40%	5	12%	21	49%	43
東山墳墓群	0	1	13	14	35%	4	10%	22	55%	40

備考 左坂墳墓群については、京都府教育委員会調査分のみを扱った。
東山墳墓群については、木棺規模を不明とする埋葬施設7期について、墓壙規模から木棺規模を想定した。

付表4 副葬品をもつ埋葬施設の割合と副葬品の組合せ

	丹後		但馬		丹波		合計
	墓壙数	(%)	墓壙数	(%)	墓壙数	(%)	
副葬品を持つ墓壙数	167	(38%)	109	(33%)	33	(27%)	309
内訳	武器・工具	72 (16%)	69 (21%)	25 (20%)	166		
	装身具	69 (16%)	29 (9%)	5 (4%)	103		
	武器・工具+装身具	26 (6%)	11 (3%)	3 (2%)	40		

備考 付表2の48遺跡を集計。

付表5 旧国別の副葬品の量

	武器・工具等鉄製品							装身具			
	刀	劍	鎌	やりがんな	刀子	その他	不明	釧	勾玉	管玉	丸玉・小玉
丹後	5 (5)	42 (27)	59 (37)	50 (46)	11 (10)	7 (4)	15 (8)	15 (1)	104 (17)	1040 (28)	12595 (81)
但馬	1 (1)	12 (12)	38 (29)	56 (54)	4 (4)	21 (7)	1 (1)		13 (3)	193 (15)	3108 (30)
丹波	2 (2)	5 (5)	10 (6)	13 (12)	3 (2)	3 (3)	6 (5)			13 (4)	353 (5)
計	8	59	107	119	18	31	22	15	117	1246	16056

※上段は、出土点数の総数、下段()内は出土墓壙数
備考 その他の中には、金谷1号墓(2)、浅後谷墳墓(1)、若宮4号墓(2)出土の計5点の円環(指輪か)を含む。
その他の中には、大風呂南墳墓の鏃・ヤス等、妙楽寺墳墓の針状鉄製品・鎌、立石墳墓の鏃状鉄製品、ボラ山の斧、狭門の鏃先を含む
不明の中には金谷墳墓墓壙出土の鉄製品群(刀子柄など)が含まれる
銅の内訳は、大風呂南の銅劍13、ガラス銅1、貝輪1である。

る。図7の後期初頭の三坂神社墳墓群では、六つある区画墓内に最大14基の埋葬施設が築かれている。図13の左下後期末の帯城墳墓群B地区では、計23基の埋葬施設が営まれてる。付表3は、後期前葉の京丹後市三坂神社墳墓群、同左坂墳墓群、同大山墳墓群および豊岡市東山墳墓群の埋葬施設の構成を比較したものである。丹後と但馬では被葬者の構成が似通っており、成人と子供(乳幼児・若年層)の比率は、ほぼ一対一であることを示している。当時の乳幼児の死亡率を考えると、ほかに埋葬されていない乳幼児の存在を考慮する必要が

の墳墓は、いずれも共通の特徴をもつことから、私はこれらの墳墓群に共通する墓制を「近畿北部型弥生時代後期墓制」と呼称することにしている⁽³⁾。この墓制の特徴は次の四つである。

まず、第一に集落から離れた丘陵の上に、埋葬空間の確保を目標とした墳丘の区画の明瞭でない台状墓を築いていることである。

第二の特徴は墳丘上に大小の埋葬施設が複数営まれていることであ

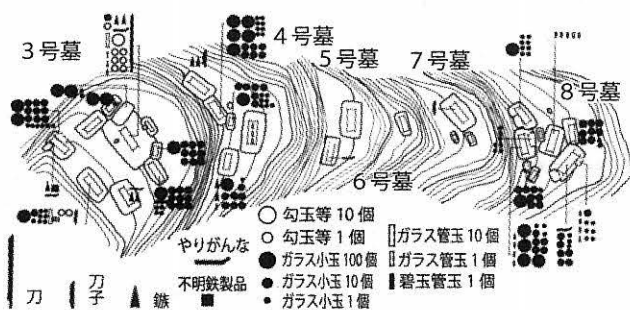
あるが、概ね家族構成を反映するものかと考えられる。なお、男女については、鉄製武器・工具類を持つているもの、装身具のみをもっているものをそれぞれ男女として数えると後期前半の墳墓では一対一に近い数値になる。

三番目の特徴は、葬送儀礼時における独特の土器供献儀礼「墓壙内破碎土器供献」が存在することである。墓壙内破碎土器供献とは、初

期の調査事例の一つである豊岡市東山墳墓群の報告書で、宮村良雄氏が「まず、墓壙を穿ち、墓壙底に木棺を組むか置くかの行為があり、続いてその内部に遺体を安置し、蓋をした後に行われる葬送儀礼行為で、破碎した土器を棺の周囲や蓋板上に置く行為」と定義付けたものである。その初現は、中期後半の弥生前期の台状墓群に見られ、木棺の上から粉々に破碎された甕・壺が出土している。後期初頭には、ほぼすべての木棺墓で実施されるようになる。用いられる土器は、煮炊きに使われた甕や水差し形土器などの調理容器と壺、鉢、高杯からなる飲食容器である。後期中葉には、この儀礼が変容し、棺上では主に甕などの調理容器のみが破碎された後に供献され、鉢や高杯などの飲食容器は墓壙上で破碎後供献されるようになる。後期中葉以降、甕一個のみを墓壙内破碎土器供献する例が増えるようになり、後期末・編年表の⑦期まで主要な埋葬施設で継続して実施されている。古墳時代前期にも数例だが報告例がある。墓壙内破碎土器供献は、図6に示した近畿北部の弥生時代後期のすべての墳墓群で実施されているほか、高槻市古曽部遺跡、福井市清水町小羽山墳墓群、新潟県寺泊町屋鋪塚遺跡など他地域にも見られ、点的に分布は広がっている。

四番目の特徴は、武器類、工具類及び装身具の副葬が頻度の高い割合で実施されていることである。近畿北部は、古墳時代に先立つ弥生時代後期の段階から鉄製品からなる武器・工具類及び玉類からなる装身具を墓に持ち込む地域であり、その量は北部九州と並んで国内最多である。副葬品の種類には、武器として鉄刀、剣、鉄（銅）鏃があ

る。工具として、鉄製のやりがんな、刀子およびのみなどがある。これらに加えて、後期後半以降には、農具の鋤、漁具のヤスなど生産具も加わっている。装身具には、頭飾り、胸飾り、首飾り、手玉、足玉、耳飾りなどがあつたことが出土部位や形状から推定される。その部材は、翡翠製勾玉、水晶製算盤玉、ガラス製勾玉、同管玉、同小玉、綠色凝灰岩製の管玉などである。このほか、鉄製の指輪と貝、銅、ガラスと材料の異なる環状の腕輪（釧）が出土している。付表4には、旧国別に副葬品を持つ埋葬施設の割合と副葬品の組合せを示している。量は、但馬、丹波に較べて丹後が多いが、総墓壙数に対する副葬品を持



鉄製武器・工具類		装身具類				
刀	鉄鏃	やりがんな	刀子	勾玉・算盤玉	管玉	ガラス小玉
		5-2	7-1		4-2, 8-5	3-4, 3-5, 3-9, 3-13, 3-14, 4-3, 4-8-1, 8-6, 8-10
		3-1, 3-3				
		4-5				
		8-7, 8-8				
		4-2				
		3-2				
		3-10				

3-10には、ほかに儀仗がある

図7 三坂神社墳墓群の副葬品の出土状況と組合せ



図8 三坂神社墳墓群全景

つ墓壙の割合は、丹後が38パーセント、但馬が33パーセント、丹波が27パーセントと近似値を示す。社会構造が似ていることを反映したものと考えられる。

四 首長墓の成長

丹後地域で検出された八二基の墳墓の中には、明らかに墓壙規模、副葬品の構成などから他の墳墓と異なる首長墓と呼べるものが三基確認できる。①期の京丹後市三坂神社三号墓第一〇主体部、⑤期の与謝野町大風呂呂南一号墓第一主体部そして⑦期の京丹後市赤坂今井墳墓第一埋葬である。この三基の首長墓の変遷を見ながら近畿北部の後期社会の変化を読み取りたい。

(1) 三坂神社三号墓

京丹後市大宮町に所在する三坂神社墳墓群は、丹後半島最大の平地中郡盆地の南東端に位置し、中郡盆地を一望する⁽⁵⁾。西へ下る丘陵を階段状に整形した六基の台状墓からなる後期初頭から前葉にかけて営まれた墳墓群で、三号墓はその最高部に位置する。三号墓は、墳頂部平坦面が一辺一五メートルを測る方形を呈する。墳頂部から木棺墓一二基と土器棺墓二基が検出された。各埋葬施設は墳丘中央部の第一〇主体部を取り囲むように配置されている。墳墓群全体では木棺墓三五基と土器棺墓四基からなる計三九基の埋葬施設を検出している。各木棺墓から墓壙内破碎土器供献された土器が出土しており、三号墓第一〇主体部を契機に造墓活動が始まったことが明らかである。副葬品は、図7に示したように鉄製武器・工具類及び装身具からなる。総量は、鉄製品二〇点、玉類三〇七〇点である。三号墓第一〇主体部は、長さ五・六九メートル、幅四・二七メートル、検出面からの深さ一・八〇メートルを測る巨大な墓壙に小口板間の距離二・三八メートルを測る組み合わせ木棺が納められていた。被葬者の頭には、ガラス管玉一三個からなる頭飾りがあり、顔の右側には水晶製算盤玉八＋ガラス小玉一〇＋

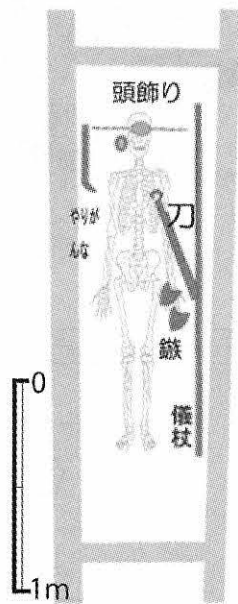


図9 三坂神社3号墓第10主体部

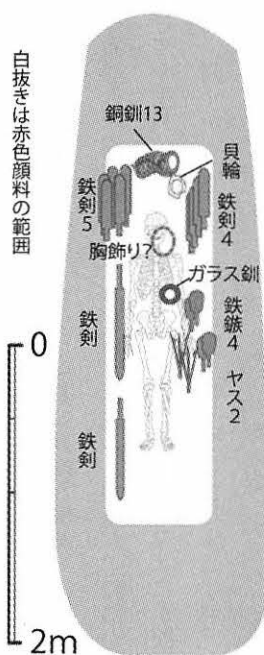


図10 大風呂南1号墓
第1主体部
棺内副葬品配置

与謝野町岩滝に所在する大風呂南墳墓群は、天橋立が形成する阿蘇海を一望する⁽⁶⁾。二基の台状墓が調査されたが、その西丘陵にも階段状を呈する台状墓群が存在しており、一群をなす可能性が高い。調査された一号墓は、全長二七メートル、幅一八メートルの長方形の台状墓に復元されている。墳頂部には木棺墓四基と土壙墓一基の計五基の埋葬施設が営まれていた。丘陵側に位置する二号墓との間には、幅約三メートル、深さ約二メートルの区画溝が存在する。溝の中央部には陸

水晶製算盤玉八+ガラス勾玉一からなる垂れ飾りが配置されていた(図9)。さらに頭部右側にはやりがんなが置かれ、被葬者の左腰部には素環頭鉄刀と弓矢2本が、さらに左側には黒漆塗りの儀仗が置かれていた。これらの副葬品の組み合わせや配置には一定のきまりがあったようである。この被葬者以降の主要な埋葬施設の被葬者に継承されている。現状では、三号墓第一〇主体部より古い副葬品を持つ埋葬施設は存在しておらず、この被葬者が「近畿北部型弥生時代後期墓制」の創始者である可能性が高い。

(2) 大風呂南一号墓

橋部状の掘り残しがある。第一主体部、第三主体部および第四主体部に破砕後供献された土器から後期中葉でも終りに近い⑤期に位置づけられる。

首長墓と考えられる埋葬施設は、墳丘中央部先端寄りから検出された第一主体部である。長さ七・三メートル、幅四・三メートル、検出面からの深さ二・一メートルを測る巨大な墓壙に長辺四・三メートル、短辺一・三メートルを測る刃り抜き式の舟底状木棺が納められていた。舟底状木棺は後期中葉から丹後地域の中心的な埋葬施設で採用が始まる新しい形式の木棺である。土器供献については、墓壙内破砕土器供献以外に、二号墓で墓壙上の土器供献が行われていることから、一号墓第一主体部の墓壙上でも行われていた可能性が高い。棺内中央部には、棺の内法を示すかのように長さ二・六メートルで幅〇・五〇・六メー

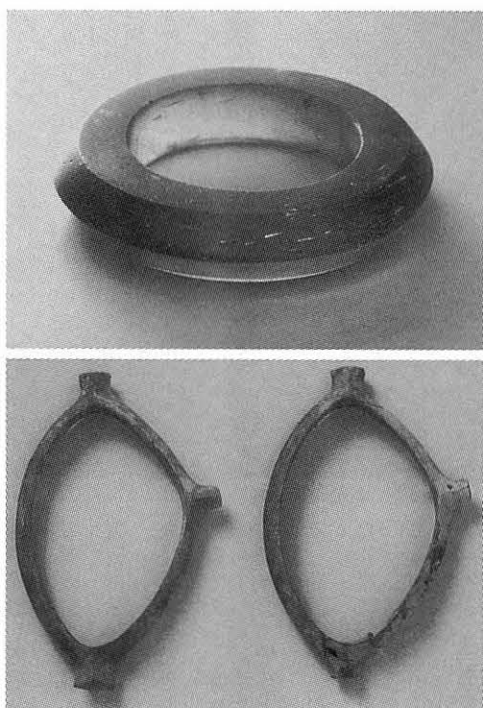


図11 大風呂南1号墓出土の
ガラス釧、銅釧

トルの範囲に赤色顔料があり、その内部から多数の副葬品が出土した。被葬者の頭部上側にはゴホウラ貝製の貝輪と銅釧一三が、顔の右側には布巻きの鉄剣が五振り、左側には同じく四振り、腹部から足元にかけてやや長い鉄剣が二振り、左側には鉄鎌四とヤス二が配置されていた。胸元からはガラス勾玉と碧玉管玉からなる胸飾りが、左手の位置からはガラス釧が出土した。大量の鉄製武器とガラス、銅、貝からなる計一五点の腕輪の出土は弥生時代の墳墓としては類を見ない。顔の左右から出土した九振りの鉄剣は柄を持たないもので、多量の鉄素材の保有を象徴するものとも考えられよう。鉄製大型武器である鉄剣については、この頃から多くの埋葬施設に副葬されるようになる。一号墓でも第一主体部以外に、第二主体部で二振り、第三主体部で一振り出土している。明らかに前代に比べて鉄製大型武器の保有が進んでいることがわかる。この首長は、これら鉄製品の配布者であった可能性を考えておきたい。第一主体部は、首長墓というより他地域との交流を深め鉄製武器の配布に深く関わった弥生王墓と位置づけることが可能である。

(3) 京丹後市赤坂今井墳墓

後期後葉でも終り頃になると首長墓はさらに巨大化する。京丹後市赤坂今井墳墓は、⑦期の三世紀のはじめ頃に営まれた近畿北部最大の弥生墳墓である。古墳時代に日本海最大級の前方後円墳網野銚子山古墳が築かれる網野平野から中郡盆地に入る狭隘な谷部に位置する。東西三六メートル、南北三九メートル、高さ四メートルを測る精美な方形の墳丘を持ち、墳丘裾部には幅三〜五メートルのテラスが巡る。丘



図12 赤坂今井墳墓

陵を成形して築いた台状墓というよりも、丘陵尾根を切断してその土を盛って築かれた墳丘墓である。弥生時代後期後葉の墳墓としては、岡山県楯築遺跡、鳥根県西谷三号墓に次ぐ規模を測る全国を代表する弥生王墓である。墳頂部には六基の埋葬施設が営まれているが、いずれも成人木棺で、家族的な性格はな

なっている。

中心埋葬施設は墳頂部中央部よりもやや奥寄りに位置し、墓壙は、長さ一四メートル、幅一〇・五メートル、深さ二メートル以上を測る。墓壙底は一段掘り込まれた二段墓壙で、そこに全長七メートル程度の舟底状木棺を納めている。棺内は未調査である。第一主体部手前は、広場状の空間地があり、墓壙上には、埋葬儀礼に伴うと考えられる五本の巨大な柱が立てられていたようだ。墓壙上には、円礫と破碎土器が堆積していた。円礫や破碎土器は、楯築遺跡や西谷三号墓などの

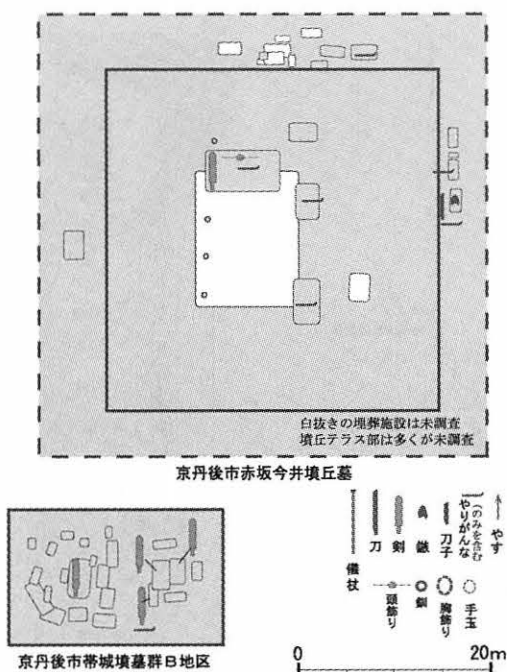


図13 赤坂今井墳墓と帯城墳墓群B支群の墳丘模式

共通性を示す。

この第一埋葬に一部重なる位置で第四埋葬が営まれていた。墓壇の規模、棺の規模・構造ともに大風呂呂一号墓第一主体部とほぼ同じである。棺内からはガラス勾玉、碧玉の管玉、ガラス管玉計およそ三〇〇点で構成される豪華な頭飾りが出土している。

図13左下に示した京丹後市帯城墳墓群B支群も同時期の墳墓で、長辺二〇メートル、短辺一三メートルほどの墳墓に復元される。墳頂部には二グループからなる計二一の埋葬施設が営まれ、中心的な埋葬施設には鉄剣が副葬されている。赤坂今井墳墓が近畿北部の王とすれば、それに従属する地域首長墓と考えることも可能である。同一地域における首長間の階層差を示す好例である。

(4) 3基の王墓の意義

以上、丹後地域における三基の首長墓の様相を概観してきた。丹後、但馬及び北丹波が同一の墓制をもち、共通した土器様式を用いていることを考えると、この三代の首長墓は近畿北部の首長墓（王墓）と考えることが可能である。三坂神社三号墓第一〇主体部と大風呂呂南一号墓第一主体部からは、多量の鉄製品が出土していること、特に大風呂呂南以降については、多くの墳墓で大型の鉄製品（主に鉄剣）が出土することから、日本海を渡った「鉄」の交易により富を蓄えた首長と考えることが可能である。

また、彼らは手に入れた鉄製品を近畿北部の地域首長に配布している様子がうかがえる。おそらく、近畿北部の各地から鉄との交換財が集められ、「王」を中心とする首長層が大陸との交易を担っていたのである。弥生時代後期の近畿北部の社会構造を考える上で、三基の王墓は、時代とともに、小さな台状墓から方形の大型墳丘墓へ、家族墓的な被葬者構成から特定の成人のみの被葬者構成へ、より大型の埋葬施設へ、そして副葬品の多量化へと変化しており、首長権の強化をうかがい知ることができる。全国的に資料に恵まれない中、弥生時代後期の地域社会（おそらく「今使譯所通三十國」の一つ）の発展を考える上での貴重な資料である。

五 近畿北部型弥生時代後期墓制の終焉

現状では、赤坂今井墳墓を最後に継続する弥生時代の首長墓は丹後

には見当たらない。おそらく、近畿北部にも存在しないであろう。あれほどたくさんあった副葬品豊かな墳墓がほとんど営まれていないのである。赤坂今井墳墓の時期を三世紀の第一四半期と考えるならば、「卑弥呼」が登場し、「邪馬台国」を中心に大きな政治的まとまりが誕生したことにより近畿北部に位置していた「國」は衰退に帰したと考えられる。次に述べる京丹後市大田南古墳群の様相がそのことを暗示している。

(1) 大田南二号墳の出現(三世紀中頃)

大田南古墳群は、中郡盆地南部の竹野川左岸の標高八四の丘陵上

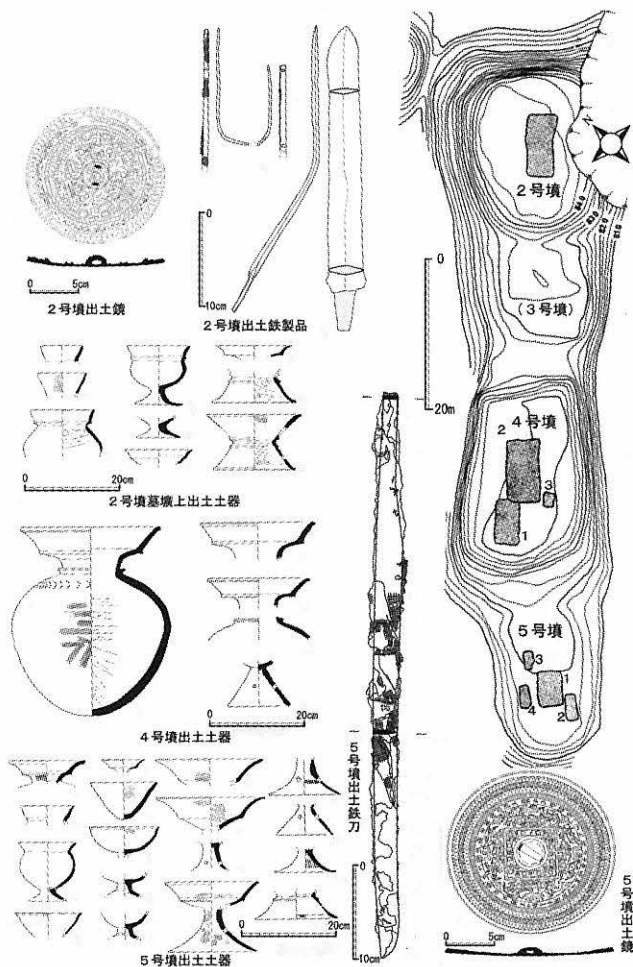


図14 大田南2、4、5号墳

に位置する。平地との比高差五〇の最高位置にある二号墳は、大宮町から峰山町にかけての中郡盆地及び弥栄町域が一望できる立地にある⁽⁸⁾。大田南古墳群の所在する丘陵では、これまでに四回の発掘調査が実施された。調査の結果、四基の前期古墳が発見されており、この内丘陵頂部で検出された二号墳、四号墳そして五号墳は、古墳時代前期初頭を前後する時期に位置づけられる。

三基の古墳の概要は次のとおりである。二号墳は、三基の内最高所に位置する二二×一八の方墳もしくは三号墳を含めた前方後方墳で、墳丘中央部に八・〇×三・六を測る埋葬施設一基のみを配置する。埋葬施設は二段墓壇で、頭位を北東にして舟底状木棺を納

める。棺内頭部右側からは中国製の龍鈕をもつ画文帯環状乳神獸鏡が、足元からやりがんな状の鉄製品がそして右棺側部外側から鉄剣が出土した。墓壇上からは一〇固体の土器片が出土している。四号墳は、二号墳と同じく標高八四に位置し、その眺望も等しく優れている。墳丘規模は二六×一六を測り、三基の埋葬施設を営む。最大の第二主体部は、二号墳の墓壇と同規模で、全長六を測る長大な組合せ木棺を納める。棺内からは水銀朱がまぎって出土したほか、足元側木口の外側から二重口縁の壺形土器が据えられた状態で出土した。五号墳は、四号墳から尾根を一段下がった標高八二に位置し、中郡盆地に

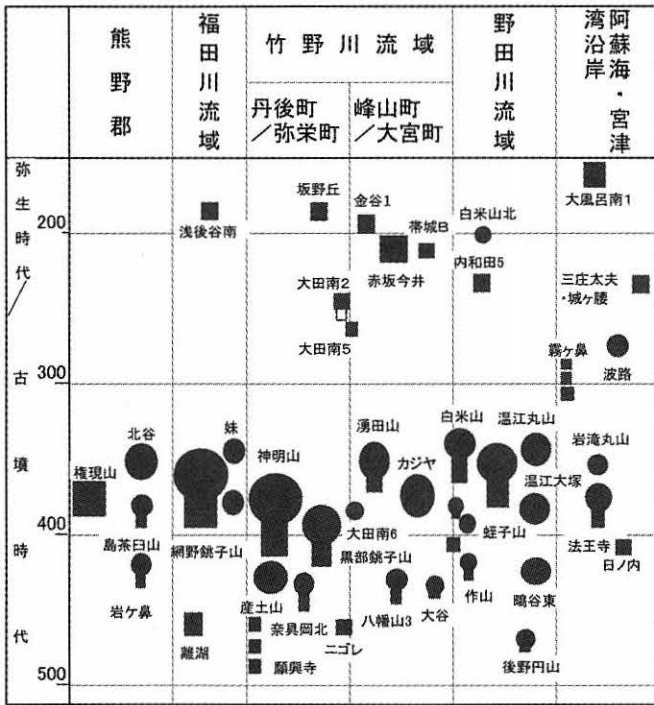


図15 丹後地域の弥生墳墓及び古墳の編年

向かってのみ眺望が開ける。墳丘は、尾根を削り出して一八・八×一二・三の長方形の平坦面を築き、四号墳側と幅五・五×深さ〇・九の溝で区画する。墳丘内には大小四基の埋葬施設があり、中心に位置する最大の第一主体部は、四・六×三・二の、深さ約一・五の二段墓壇の下段に、組合せ式石棺を納める。棺内から鉄刀一振りと青龍三年(二三五)銘方格規矩四神鏡が出土した。墓壇上面から土師器約二〇〇個が出土した。

(2) 弥生墳墓との比較

この三基の古墳の特徴を前代の墓制と比較すると次のとおりである。立地は、眺望の優れた比高差五〇以上の丘陵上であり、大風呂南一号墓などと共通している。墳丘上の埋葬施設の数は、二号墳は一基で前代にない個人のための墳墓と評価され、四・五号墳は前代変わらぬ小児を含む多埋葬墓である。

中心埋葬施設の棺は、二号墳が大風呂南や赤坂今井で用いられた伝統的な舟底状木棺で、四号墳に用いられた棺は、古墳時代前期以降丹後地域で長大化し、首長墓で用いられる組合せ木棺である。そして五号墳には、箱式の組合せ石棺が用いられている。連接する三基の古墳の埋葬施設が三様を呈することは弥生時代後期前半の組合せ式木棺、後葉の舟底状木棺の使用状況とは大きく異なっている。

土器供献儀礼としては、墓壇上で破碎土器供献が行われているが、近畿北部の伝統的な墓壇内破碎土器供献は存在しない。

副葬品には、刀剣類に加えて、銅鏡が新たに含まれている。一方、玉類に代表される装身具は出土していない。また、副葬品の総量は激減している。

以上のように大田南古二号墳は、近畿北部の弥生墓制の伝統を受け継いだ舟底状木棺を用いるものの、個人のための墳丘、墓壇内破碎土器供献の不在、そして副葬品の構成の変化など、他地域の影響を受けている様子がうかがえる。三世紀中頃の周辺状況を踏まえると、大和を中心とする新たな政治体制の中に組み込まれたことによるものと考えるのが妥当であろう。

六 おわりに

近畿北部は、弥生時代中期の大型貼石墓の出現の時期から弥生時代後期後葉まで、地域色豊かな統一された墓制を営んできた地域である。

弥生時代中期の奈良岡遺跡での鉄生産、大風呂南一号墓の多量の鉄製品の副葬など、鉄を糧に豊かなクニを築いていたことは想像に難くない。後期の副葬品配置が朝鮮半島の地域と一部共通することを考えると、半島部と密接な交易を行っていた可能性が高い⁽⁹⁾。その交易を通じて、近畿北部が豊かなクニとして栄え、まとまった墓制を営むことができたであろう。その地域が、古墳時代に入ると急激に力を失ったのは、大和を中心とする新たな政治体制が、瀬戸内ルート⁽¹⁰⁾の交易を手に入れ日本海ルートの交易の役割が小さくなったためであろう。

大田南二・五号墳からしばらくすると、日本海側最大の三基の前方後円墳が誕生する。再び、日本海ルートの役割が大きくなったことが考えられる。その三五〇年ほどのちの七二三年には、丹波から「丹後」として切り離されてしまうのは、かつての大国が再び力をもつことを恐れた大和王朝の大いなる意志が働いたものと考えることができると近畿北部の弥生墳墓の発掘調査資料は、この地域の弥生時代中期から古墳時代前期にかけての盛衰を理解する上で非常に有効な資料である。この地域の研究を通じて、少しでも当該時代の日本の政治状況を解明していきたい。

【註】

- (1) 磯野浩光「丹後の氏族と伝承」『宮津市史』通史編上 二〇〇二
- (2) 仁木 聡「四隅突出型墳丘墓の「配石構造」の系譜と展開「四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究」島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター 二〇〇七
- (3) 肥後弘幸「丹後の弥生王墓とその周辺―近畿北部型弥生時代後期墓制の伝統と変革―」『初期古墳と大和の考古学』石野博信編 二〇〇三
- (4) 「上鉢山・東山墳墓群」(豊岡市文化財調査報告書第二六集) 豊岡市教育委員会 一九九二
- (5) 「三坂神社墳墓群、三坂神社裏古墳群、有明古墳群、有明横穴群」(京都府大宮町文化財調査報告第一四集) 大宮町教育委員会 一九九八
- (6) 「大風呂南墳墓群」(岩滝町文化財調査報告書大一五集) 岩滝町教育委員会 二〇〇〇
- (7) 「赤坂今井墳丘墓発掘調査報告書」(京都府峰山町埋蔵文化財調査報告書第二四集) 峰山町教育委員会 二〇〇四
- (8) 「大田南古墳群」(京都府弥栄町文化財調査報告第七集) 弥栄町教育委員会 一九九一、「大田南古墳群、大田南遺跡、矢田城跡第二次」第五次発掘調査報告書」(京都府峰山町埋蔵文化財調査報告書第一八集、京都府弥栄町文化財調査報告第一五集) 峰山町教育委員会、弥栄町教育委員会 一九九八
- (9) 福島孝行「弥生墳墓における鍔の副葬方法について」『京都府埋蔵文化財情報』第七八・八一号 二〇〇〇・二〇〇一
- (10) 福永伸哉「中国鏡流入のメカニズムと北近畿の時代転換点」『丹後の弥生王墓と巨大古墳』季刊考古学別冊10 二〇〇〇

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)